53 安倍川橋

あべがわばし

「駿河路や花たちばなに茶の匂い」芭蕉

駿河路はお茶の栽培が盛んな地として知られている。

駿河路は国道１号線の東海道や東名高速道路、東海道本線、東海道新幹線が、それぞれ趣を変えて走り抜けている。駿河路の中心都市である静岡は、東海道五十三次の宿場町であり、今川・徳川氏居城の駿府城が置かれた城下町である。現在は県庁所在地になっている。市の中心の西側には安倍川が流れている。

その昔、安倍川の川越えは徒渉（かちわたし）方式（肩車や連台（れんだい）など人夫を使って渡る方式）で、歩いて渡った。関所の取り締まりはいかに厳しくとも、通行手形があれば通ることができた。しかし安倍川は一度大雨ともなると、増水し、川留めとなり長期間通行が出来なくなった。旅人は宿場に泊まらざるをえず、その出費は膨大なものになった。まさに、「箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川」というが、同じ状況がここ安倍川でも江戸の末期まで続いた。

慶応４年（1868）３月５日、はじめて橋らしいものが架けられた。同日に、有栖川（ありすがわ）東征大総督宮を渡すために、応急の橋を架けたのである。宮さま１人を渡す仮橋で、供の人びとは徒歩で川越えをした。

明治４年（1871）４月、太政官布告をもって橋の建設一般、とくに民活による有料橋架橋が奨励されたこともあって、同年の５月から６月にかけて仮橋が架かった。これは簡単な橋で、川の水量が少ない時は橋を渡り、水量が多くなると渡し船で川を越えなければならないという程度のものであった。それでも、人びとには大変喜ばれた。

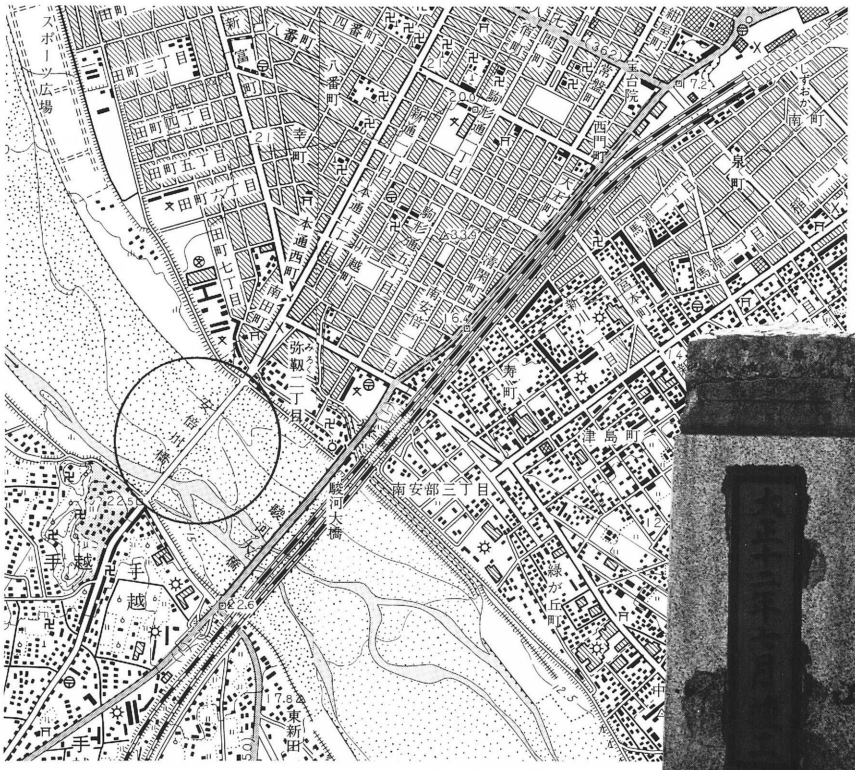
明治７年（1874）３月、安倍川に本格的な木橋が完成した。橋長280間（504ｍ）、幅２間（3.6ｍ）を有し、安水橋（あんすいばし）と命名された。静岡県大里村弥勒に住む宮崎総吾が独力で架けた賃取橋である。１人４厘、馬車４銭５厘を徴収していた。この橋は明治29年に、静岡県に移管され、明治36年には県によって再度木橋に架け替えられた。ちなみに、新橋－神戸間の東海道線が開通したのは明治22年（1889）７月であった。

大正12年（1923）、ボーストリングトラス形式の鋼製の橋に架け替えられ、「安倍川橋」と名前を変えて、現在にいたっている。鋼材はイギリス製で、橋梁部の工費は50万円、道路工事費をふくめると109万円であった。おりしも関東大震災が起きた年に、この橋は完成している。

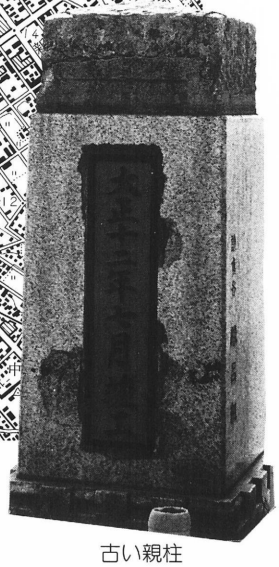
昭和37年（1962）、現在の国道１号線に架かる駿河大橋の完成によって、安倍川橋は建設省から静岡県に移管され、旧国道１号線は県道藤枝静岡線に変わった。

平成２年３月、右岸側の２連のトラスを撤去して１径間のローゼ形式の橋に変えた。この部分で幅員を広げて右折レーンを設け、交通渋滞の解消を図ったのである。〔ＨＩ〕

竣工年月：大正12年（1923）７月
所在地：静岡県静岡市
河川名：安倍川
橋長・幅員：490.80ｍ×8.85ｍ（車道7.35ｍ＋１×1.50ｍ）
径間数・支間長：①12×34.14ｍ＋②１×70.0ｍ
形　式：①ボーストリング・ワーレントラス、②下路ローゼ桁



（1:25,000　静岡東部，静岡西部）



古い親柱

新しい親柱

〈1994年３月３日，撮影・いずれも松村　博〉